

JICA 中国事務所ニュース

2009年10月

目次

【秋受賞特集】

- ◎ 友誼賞受賞 1
- ◎ 黄山賞受賞 4
- ◎ 遼寧省外国専門家賞受賞 5

【ニュース】

- 鳩山総理大臣のパーティーに招待されました 6

【帰・赴任者紹介コーナー】 7

【寄稿コーナー】 8

【中国の動き】 9

秋受賞特集

9月29日、「中国国家友誼賞」の授賞式が北京人民大会堂で行われました。「友誼賞」は中国の社会開発、経済、科学技術、教育、文化等の発展に貢献した外国人に授与される最高の賞であり、1991年に創設されたものです。1991年からこれまでの間、JICA 中国事務所初代所長の八島継男をはじめ、さまざまな分野の専門家等 JICA 関係者に授与されてきました。

今年は「太湖水環境修復モデルプロジェクト」の国内支援委員であり、また短期専門家でもあった福島大学教授稲森悠平氏、「黒龍江省木材総合利用計画」のプロジェクトリーダーをされ、アフターケアでも専門家としてご尽力いただいた黒龍江省林産工業研究所終身顧問の千葉保人氏、ODA 事業である重慶モノレールの計画策定と建設に尽力された社団法人海外鉄道技術協力協会最高技術顧問の菅原操氏の3名の関係者が受賞されました。

記念すべき建国60周年の本年、3名もの関係者が友誼賞を受賞されたことは非常に喜ばしいことです。心よりお祝いを申し上げます。

JICAは今後も中国の社会・経済の発展に貢献する協力を実施していきます。

JICA 太湖プロジェクト等による「友誼賞」受賞に対する御礼

— 福島大学理工学群理工学研究科 教授 —

((独)国立環境研究所客員研究員)

稲森 悠平

平成21年9月29日に北京人民大会堂で、中国の発展に貢献した海外の研究者等専門家を対象とした最高の賞である「友誼賞」を受賞させていただきました。これも偏に JICA のおかげと深く感謝致しております。

昭和59年 JICA 短期専門家として中国長

春、内モンゴルにて羊脂からの有価物質回収の技術指導をして以来150回以上訪中しております。その間、アオコの発生原因となる生活排水中に含まれる窒素・リンの除去可能な小規模排水処理技術(バイオエンジニアリング)、自然水域に工学の技術を導入した



太湖プロジェクトサイトにて

水環境再生手法としての水生植物・土壌の浄化能を強化する生態工学(エコエンジニアリング)、更にこれらを流域特性に応じて配備するバイオエコシステム技術の移転を20年以上にわたって実施してきた成果が高く評価されたものといえます。

平成13年～19年、JICA プロジェクト技術協力として中国の最重要湖沼である太湖の再生を目指した「太湖水環境修復モデルプロ

ジェクト」に日本側研究責任者として参画し、バイオエコシステムの技術移転を成功させた結果、日中友好の重要な基盤が構築されました。

現在、更にバイオエコエンジニアリングの国際化を目指した研究開発を推進しております。また、中国への技術移転、環境技術教育等を上海、北京、大理等の機関で毎月実施しているところです。

父が韓国のソウル大学医学部(当時京城医専)で学んだあと戦時中軍医として中国に従軍しておりましたが、私も小さい時から韓国、中国のために貢献できたらと努力してきました。1999年には JICA 韓国水質改善プロジェクトの6年間の成果が評価され、外国人として初めて韓国総理大臣表彰を受賞致しましたが、それに引き続き今回、中国で受賞できましたことは、これまでの業績が評価されたものと、JICA 等関係者に深く感謝する次第です。

(ご本人より寄稿いただきました)

重慶市の都市軌道交通への貢献で中国の「友誼賞」を受賞しました

— 社団法人海外鉄道技術協力協会最高技術顧問 —

菅原操

中国政府が社会開発、経済、科学技術、文化などの発展に貢献した外国人専門家を称える友誼賞が、10月29日、人民大会堂で、社団法人海外鉄道技術協力協会最高技術顧問の菅原操さんに授与されました。菅原さんは、軌道交通の専門家として ODA 事業である重慶モノレール2号線の計画と建設や重慶市の軌道交通網の全体計画の策定に協力されました。今回の受賞は、菅原さんの貢献をよく知る重慶市の推薦によるものです。

「すべては、JICA のフィージビリティ調査から始まりました」と菅原さん。1992年のフィージビリティ調査(団長:菅原さん)は、複数ケースを比較分析し、急勾配の多い重慶に最適なモノレールを提案。大気汚染が深刻な重慶で、汚染を排出しない交通機関であるモノレールは、環境保護と生活向上の両方に



授賞式にて菅原操氏(左側)

寄与する事業として、2001年、円借款案件形成促進調査(団長は菅原さん)が実施され、2001年271億円の円借款が供与されました。菅原さんは工事のコンサルティングチームのリーダーも務められました。モノレールは2005年6月に開業。長江と嘉陵江の間の細長い渝中半島を縦貫した全長19キロのモノレ

ールです。政府間協力だけでなく、フィージビリティ調査、各種設計、車両、信号システムなどには、社団法人海外鉄道技術協力協会、日本モノレール協会、日立製作所をはじめ日本企業の技術が生かされ、運転手や技術者の訓練は日本でも実施。現在乗客数1日のべ11万人、2008年11月26日には総乗客数1億人を達成、まさに重慶市民の「足」となっています。また、これまで本事業は、「環境友好プロジェクト賞」(2008年。中国政府が環境保護事業に与える最高位の賞)、「中国土木工程詹天佑賞」(2005年と2009年。中国土木業界の最高賞)を受賞しました。

「シンガポール、ドバイ、韓国のテグでも日本の技術を活用したモノレール建設がおこなわれていますが、重慶モノレールの成功が背景にあります」(菅原さん)とも。ある中国の老幹部から「重慶モノレールのODA案件としての要請は、1990年代、日中の交流が目に見え、かつ双方が利益を受ける事業をつくりたいという精神が中国政府にあった」と耳にしたことがあります。日本のODA事業により、重慶市の発展と環境改善が促されるばかりでなく、日中の企業交流、重慶市民の日本理解が促進され、この事業の成功を契機に、日本の技術が世界に発信されています。

(中里太治)

国家友誼獎をいただいて — 元 黒龍江省木材総合利用研究プロジェクト — 千葉保人



研究を指導している千葉保人氏

2009年度「友誼獎」をいただき、感謝と同時に大きな借りを背負った思いです。

黒龍江省木材総合利用研究項目は1980年代当時中国最大の木材生産地域だった黒龍江省に木材の総合的有効利用を研究する拠点「林産工業研究所(現木材科学研究所)」を創るプロジェクトでした。1985年からフォローアップを含めた7年間と1995年から2年間のアフターケアで日本の有力研究所に匹敵する施設が整い、専門家派遣と研修員交流によって、研究面ばかりでなく相互理解と友好促進に計り知れない成果がありました。私は計画時の長期調査員、2年間のプロジェ

クトリーダーさらにアフターケアを担当しています。

その後、木材資源の枯渇で黒龍江省の比重は低下し、人材流失、後継研究者不足、国の研究費減少など、情勢の変化によって研究機関としての求心力は構想時より弱まりました。

研究所は縮小しましたが、設備、機材の多くは20年以上たった今も現役として研究・製品検査などに使われており、研究所の誇りにもなっています。

計画から関わった者として研究活動を盛り上げたいとの思いから、プロジェクト終了後も年に1~2回個人的に訪問し、講義や研究指導によって日本の研究状況や関連規格、木材産業の現況を伝えてきました。それらの資料は私の古巣森林総合研究所の関係研究室、企業・団体のお世話になっています。研究機材の使い方指導、保守・修理も大事な仕事で、メーカーから技術情報の提供を受けて研究所が自力で修理し、どうしてもメーカーの手助けが必要な場合はJICAに修理専門家の派遣をお願いしたこともあります。

JICAプロジェクトの残した有形無形の資産

をもとに、様々な方々のご支援、中国側の友好的な協力があったからこそ、これまで続けることが出来たことに深く感謝しています。個人的な活動は自由で束縛されない反面、経済的制約と客観性に欠ける恐れもあります。この欄をお借りしてJICAにお願いしたいのは、古いプロジェクトの情報収集とデータベ

ースの整備(ボランティア情報も含めた更新)、友好の証でもある機材の維持など個人の手には負えないことへのご支援です。貴重な資産を大切にしている中国の立場にも配慮して、気軽に相談にのっていただける「開かれたJICA」を望んでいます。

(ご本人より寄稿いただきました)

黄山友誼賞を受賞して

— 独立行政法人 森林総合研究所、林木育種センター 関西育種場 — 林木育種科学技術センター計画プロジェクト元専門家 岡村政則



黄山賞授賞式(右から2人目が岡村氏)

この度は、荣誉ある黄山友誼賞を賜りました。ご推薦いただきました関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

今回の受賞は、2001年から2008年までのJICAプロジェクト「日中協力林木育種科学技術センター計画」において中国安徽省でバビショウのマツノザイセンチュウ抵抗性育種の技術指導に取り組んだ功勞によるものでした。今回の受賞者は日本とドイツから各3名、韓国、アメリカ、カナダ、イギリスから各1名、合計10名でした。安徽省でこのプロジェクトを進めるに当たっての指導は、当初、戸田忠雄長期専門家が行い、引き続いて生方正俊長期専門家が、その後を私が担当しました。マツノザイセンチュウ抵抗性個体の選抜は、マツ材線虫病の被害地から抵抗性候補母樹を選び、その後代の苗木にマツノザイセンチュウを接種して強さを判定する方法で進めました。2008年にプロジェクトは終了しましたが、



マツノザイセンチュウ接種検定の指導を行う岡村氏(画面中央)

中国側は、安徽省林業庁から安徽省林業科学研究院に研究の主体を移して現在も日中共同で研究を行っています。この夏に抵抗性候補木のつぎ木苗にマツノザイセンチュウの接種検定を行いましたので、今年中に抵抗性個体を決定し、子供苗を普及してゆく運びとなりました。

中国でのマツ材線虫病による被害は、これまでに12省、1直轄市、1自治区に及んでいます。そのため、伐倒処理、薬剤の散布等が精力的に実施されていますが、現在も拡大している状態です。日中共同で開発した抵抗性バビショウが立派に育つことを願っています。このプロジェクトを推進するに当たり、これまで、関係者の皆様にはカウンターパートの日本での研修、短期専門家の派遣等、大変お世話になりましたことにお礼申し上げます。今後ともご指導、ご協力をよろしくお願い致します。

(ご本人より寄稿いただきました)

遼寧省外国専門家栄誉賞を受賞して
- シニアボランティア -
梶巻正男



友誼賞を受賞した梶巻正男氏(左側)

瀋陽市環境保護局で環境管理の仕事しているシニアボランティアの梶巻正男です。

この度遼寧省より遼寧外国専門家栄誉賞を頂きました。大変光栄に思っております。この度の受賞は、JICA中国事務所の皆様や、カウンターパートを含む現地のスタッフの協力があったからだと思えます。お礼を申し上げます。

瀋陽市は環境モデル都市にも認定され、10年前とは比較にならないほど、環境改善されて来ていますが、市は更に川崎市との「循環型経済発展協力協定」又「国家生態市」へと環境の分野で積極的な取り組みを続けています。

私は今回保護局スタッフの要望に応じて、年率15%の勢いで増加している自動車の騒音対策、埋立では限界にきている下水処理汚泥の処理、中高生への環境教育授業などに取り組んでいます。

1年の滞在期間では、十分なことが出来ないのが残念ですが、①現場第一主義;現地・現物の状況確認の大切さ②日本での成果の移植;30年を超える日本の騒音対策の実施策を状況に応じて導入する③広範囲な人的交流の実施;中小企業診断士(国際派診断士研究会)の瀋陽・大連環境視察の立案・実施などを主眼として活動を行って来まし

た。

どれほど、瀋陽市の環境管理に貢献できたか心もとないのですが、一層保護局、市民の皆さんに喜ばれるよう力を尽くしたいと思います。

ありがとうございました。

(ご本人より寄稿いただきました)

ニュース

鳩山総理主催のパーティーに招待されました



青年海外協力隊員に囲まれた鳩山総理大臣

10月9日夕方、鳩山総理大臣が日中韓三国首脳会談のため訪中されたのに併せて急遽、北京在住日本人との交流パーティーが大使公邸で開催され、JICAからは山浦所長、専門家2名、協力隊員6名が招待されました。

冒頭、鳩山総理から「まだ政権が発足したばかりで、私の頭から湯気が立っているのがわかりますか？」とのジョークが披露され、150名ほどが招待されたパーティーは、打ち解けた雰囲気での始まりでした。乾杯の音頭をとられた岡田外務大臣からは「青年海外協力隊員を始め、皆さん中国でがんばってください！」との激励をいただきました。

鳩山総理と一緒に訪中された幸夫人、岡田外務大臣、直嶋経済産業大臣、松島官房副長官は、それぞれ会場の輪の中に入り、たくさんの出席者と言葉を交わしてくれました。

特に協力隊員は紺ブレザーの制服が目を引きこもあつてか、鳩山総理を始めVIP全員から声をかけられ、「地方での活動は大変ですね」などとねぎらいの声をかけられていました。実は、6名の隊員はもともと翌日に帰国する予定で、2年間の活動の最後の最後にこのパーティーに招待されたことに、感無量といった様子でした。

普段はテレビや新聞でしか拝見しない総理



一緒に記念写真を

大臣を始めとする国のトップの方々は、意外なほど気さくに交流してくださり、出席した方はみなとても楽しいひと時を過ごすことができたのではないかと思います。私達の活動のとても大きな励みになりました。

(大久保晶光)

帰・赴任者紹介コーナー

(1) 長期専門家 今井淳一

～持続的農業技術研究開発計画 業務調整/農業技術普及～



初めまして、今井淳一と申します。持続的農業技術研究開発計画フェーズ2で業務調整及び農業技術普及担当の専門家として赴任いたしました。13年前に中国語を学ぶために生まれて初めて飛行機に乗ってやってきて、そして半年を夢中で過ごした北京に、また8年前には JICA 中国事務所でインターンとして約3ヶ月を過ごした北京に、今回はこういう形で戻ってこれで本当に、本当に嬉しく思っています。北京の変わりぶりには大変驚いていますが、昔ながらの北京も新しい北京も楽し

しみながら、環境に優しい中国の農業・農村を目指してささやかながら貢献できればと思っております。妻がベトナム人と言うこともあり、また、これまでベトナムに5年間おりましたので、ベトナムのことも引き続き関心があります。中国・北京におけるベトナムに関する情報(ベトナム料理情報?)もお待ちでしたら教えて下さい。プロジェクト専門家としては初めての仕事ですので、是非皆様からのご指導を宜しくお願い致します。

(2) 長期専門家 合田祐介

～耐震建築人材育成プロジェクト 業務調整～

9月26日に「耐震建築人材育成プロジェクト」の業務調整専門家として赴任した合田祐介です。2000年から2007年まで、安徽省と北京市でそれぞれ技プロの業務調整を担当させていただき、今回は3度目です。北京オリンピックに前後して、この2年間で北京市は更に大きな変貌を遂げており、文字通りアジア社会経済の変化の真っ只中に生活しているんだなあ、と感慨を新たにしています。JICA 援助の方向性はキャパシティー・ビルディング、ひいてはキャパシティー・ディベロップメントにシフトしている感がありますが、本プロジェクトもまさに人材育成が柱となっています。



プロジェクトは開始からすでに4ヶ月が経過し、チーフアドバイザー及び耐震設計の専門家とカウンターパートの間には良好な関係が構築されており、またカウンターパート機関にも過去一定の人材育成実績、及び日本との技術協力経験があることから、今後の引き続いた日中双方の努力により、良いプロジェクトとなるのではないかと考えています。そして、四川大地震の復興支援プロジェクトとして、人材育成の成果をいかにして中国末端の現場まで確実に裨益させるかを、常に念頭に置きながら仕事をしようと肝に銘じておりますので、今後とも宜しく願いいたします。(前回の赴任以降、一部の方々の間で某元業務調整専門家と容貌が似ていると言われており、今回も赴任早々、中国事務所でのブリーフィング時に某元業務調整専門家と間違われ、軽いショックを受けています。)

寄稿コーナー

生涯の中で最も重要な4年間



2005年8月17日から2009年9月30日まで、日本国際協力機構(JICA)の研修員として、日本国立政策研究大学院で開発経済学の修士・博士課程を修了し、国際開発研究修士学位と開発経済学博士学位を取得しました。日本における留学生生活で開発経済学分野の知識を学んだだけでなく、日本社会への理解と認識を深めることができました。私は、日本における4年間の研究は私の今後の仕事と生活に大きな影響を与えることになるだろうと信じております。

私が参加したプロジェクトは国際開発研究プロジェクトで、内容は徹底した開発経済学のプロジェクトでした。プロジェクトの早期設立者である速水祐次郎教授は、世界でも有名な開発経済学の専門家で、速水教授の著作『開発経済学—諸国民の貧困と富』(“Development Economics: From The Poverty To The Wealth Of Nations”)は中国国内でも翻訳され、出版も版を重ね、多くの大学の開発経済学教材として指定されているだけでなく、全国人民代表大会と政治協商会議代表の推薦図書にもなっております。2005年10月、修士課程に編入したころ、幸運にも速水教授の授業を聴講する機会に恵まれ、試験も受けました。速水教授は今まで私が出会った教師の中で、もっとも厳格、あるいはもっとも真摯な教授でした。速水教授

の採点は、けちと形容できるほど厳しいものでした。そんな速水教授の試験で高得点をとるのは、容易なことではありません。ですから教授が指導する国際開発研究プロジェクトは政策研究大学院の専門プロジェクトで最も厳しいものでした。ほぼ毎年マイクロ経済学、計量経済学と開発経済学で不合格の学生がでていましたが、学生が勉強しなかったからだとは言い切れません。というのも私が参加したこの学科の学習と試験は、緊張度と難度からいっても中国での大学受験に劣らず、毎年不合格の学生がでるのも無理はないものだったからです。

日本留学のこの4年間は、生涯の中で最も重要で、懐かしく思い出す年月となるでしょう。ただ人生では多くの場合、得るものがあれば失うものもあり、失った、あるいは残念にも欠けていたものは家庭でした。家族の理解と支えに感謝し、将来、当時の博士課程進学決定が正しかったと証明したいと考えています。最後になりましたが JICA、教育に携わって下さいました日本の教授の皆様、長い期間日本への研修へ送り出してくれた中国国家知識産権(知的財産権)局の上司の理解に、そして私を助けてくださったすべての人に感謝いたします。

(長期研修員 張海洋)

中国の動き

テレビの前で過ごした 10月1日



我が家のベランダから撮れた航空機

今年の10月1日、中華人民共和国は還暦を迎えました。当日は「閱兵式」、10万人規模の「群集デモ行進」、張芸謀(チャン・イーモウ)監督演出の「交歓の夕べ」などが行われ、中国建国60周年を盛大に祝いました。その中でも特に注目を集めたのが、ギネス記録を3つも更新した天安門広場の花火です。「美しい山河」、「楽しい家庭」、「雪の山脈」の3枚の花火の絵が、北京の夜空に映し出されました。この花火の絵は、面積、用いた花火の数、花火の種類という3項目で世界記録を更新。ギネス記録として申請される予定です。

我が家では、父と母が建国35周年の夕べに、私が建国50周年のデモ行進に参加した経験があります。今回は1日の朝に家族全員で集まり、一緒にテレビで「閱兵式」を見ました。家族でテレビを見ながら、建国35周年から今年の60周年までの、25年間の変化をみ

んなで思い出していました。父の参加した25年前の夕べの際には制服は配られなかったため各自で式服を用意し、また、家にはテレビがなかったので、ラジオで「閱兵式」や「夕べ」の様子を聞いたそうです。私が参加した建国50周年のデモ行進の練習は半年前から行われ、夏休みも酷暑の中毎日演習しました。そして、私は優秀学生に選ばれ「群集デモ行進」の第一列目に選抜されました。つらい練習でしたが、1列目に選ばれ、私はもちろん家族も大喜びしたのが昨日のことのようです。当日は家族全員がテレビの前で私が映るのを待っていましたが、29インチのテレビでは私の姿を見つからなかったそうです。その後私は日本に留学、帰国後結婚し、また、来年には母は退職を迎えます。

家族の思い出話を話している最中に、航空機が40インチの液晶テレビの画面に映ると同時に我が家のマンションの上を飛んでいきました。家族全員ベランダに移動し、カメラやビデオでその様子を撮影しました。

25年前の建国35周年にはテレビがなかった我が家は、50周年には29インチのブラウン管テレビで行進の様子を見、60周年の今年は40インチの液晶テレビでその様子を見ることになりました。国慶節の連休の初日は、テレビの前で祖国の発展と、家族の歴史を感じた1日でした。

(馬理)

=====
* 皆様からの情報提供、大歓迎です。また、本紙に対するご意見、ご提案などいただければ幸いです。いずれも中国事務所沈 暁静 (shenxiaojing.cn@jica.go.jp) へてお願いいたします。
=====

* その他お知らせ

JICAのホームページ: チャイナ ライブラリー(和文・中文)

> <http://www.jica.go.jp/china/library/news/index.html>

> <http://www.jica.go.jp/china/chinese/library/01.html>

チャイナ トピックス(和文・中文)

> <http://www.jica.go.jp/china/topics/index.html>

> <http://www.jica.go.jp/china/chinese/topics/index.html>